

特集1

看護学校での薄い天文普及

飯塚礼子（明星大学、日食情報センター）

1. はじめに

2021年10月26日に行われた中部支部会にて、上記の題目で5分間の話題提供を行った。今回は、結果発表ではなく天文普及の捉え方を、斜め横、それもかなり端っから行ってみたので、それについてご紹介する。

2. 天文普及に濃度はあるのか

私が係わっている天文普及には、様々な場面があり、その内容も多岐にわたっている。ひとつに、「星空観望会」がある。例えば、私の勤めている科学館では、授業として小・中学校に出かけ、夕方（宵の空）に見える天体を使い星の動き、その季節の星座、星の色などを教えているまたは学ばせている。また、授業ではなく保護者主体での星空観望会もある。こちらは、開催時期見える天体を望遠鏡で覗く形が多く、曇天時には室内にて何かしらのプログラムでしのぐものもある。昼間行うワークショップも開催する。これらは多くの天文愛好家がそれぞれの地域で行っている場合もあり、観光として星空案内人さんたちと協力しあい地域を盛上げているところも多くなってきていると感じている。これらに参加する児童、生徒、大人たちは天体を見る・知るといった目的の為にその場に参加しているのであって、参加者は普及されているという認識はなくとも、それらを受け取る用意はあると感じている。

今回の私の目的は、天文に関係ない、または意識をしていない学生に、天文普及を行ってみようとしたことである。

2.1 薄い天文普及とは

看護学校では物理が必須科目である。私は看護学校での物理非常勤講師も務めており、

看護学校1年生に物理の授業を行っている。私は大学での物理の非常勤講師でもあるが、物理に対する心構えは看護学生と物理専攻の学生の間には違いがある。そこで、看護学生の授業では、物理への壁を取り払う目的で最初の授業に星座の話をしている。幸い現役のプラネタリウム解説員でもあるので、話題には事欠かない。話題提供として「薄い天文普及」と名乗ったのは、授業到達目標の中に天文は含まれないが、取り掛かりまたは、きっかけとして宇宙・天文・星座の話をする事により、学生が天文に興味を抱き、その結果天文普及をしていることになるのではないかとということである。このコロナ禍においてWHO（世界保健機関）のシンボルマークの「杖とへび」は、へびつかい座のアスクレピオスであることの話が、看護学生には受けるようである。もちろん科学とは物理とはと言う自然科学の法則・根拠の大切さを合わせて話しており、ギリシャ神話を語っているわけではないので付け加えておく。要は、天文普及の切り口はどこでも良く話題提供したことにより興味を抱かせる一端になったのは、間違いないようである。

3. おわりに

普及する側は熱い心で語ることも多いだろう。それでも、さらっと語る薄い天文普及があっても良いのだと感じている。看護学生からの毎年の授業アンケートでは、この天文の話から物理に興味を抱き垣根がなくなったとのコメントをもらうことも数回ある。私としては普及成功であると考えている。

飯塚礼子